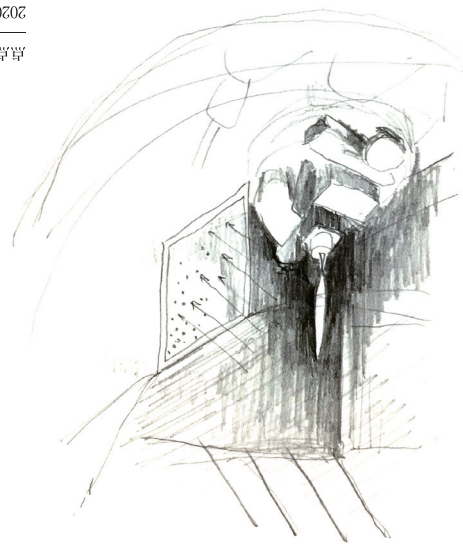
点点（ぽちぽち）vol.0「盲目のブランクーシのはなし」
2020年8月5日発行　著／発行 コイズミアヤ
2020年10月3日2刷　coizumi@sf7.so-net.ne.jp
2021年6月3日3刷



2019.12.6

ブランクーシは見えてるものだけを彫ってない
一つ一つ自問自答して、手の一つ一つをよこうすで。
見るものだけを手のひらの中にいれて
見えない、見えてる以上に ひの
どこそうだと見ているのかわからない。目の前にあるものの ボディーリの彫像でと
の部屋をうろうろ自分を見る。見ているものはここにはないとうそ。
なぜって、アトリエでのブランクーシの作品展覧会は まずに見ているこの手のつかい
を まってくれている。ブランクーシのこの作品を見ると もやもやしてくるのは
（つくったのが、何に感じているのかってこと）を 見せてくれている
それは同じこと。だからこそ、なぜ彫の、存在感が強くて強くていいと思い
ではなく、遠目 から見ると 彫をうごかそうは 思っていない。この見ようの自体
を、なんとも言えない 自分のアトリエでは ~~ずっと~~ 自分で自由の
まるで
ように 見をつくっている。西でいいかの ! 西から
いるように、それでは 不可解な 虚ひょうをコーナーにすると 「作品」 。 ダ目の
次
数に
数にはしたって自分はやはり、でも自分は、
というにうえで つくられたもの なぜ、 見をつくっている。

盲目のブランクーシのはなし

コイズミアヤ

ぽちぽち

盲

はじめに

ブランクーシについての個人的な勘違いから始まった思考が、
私にとっては大切なものに感じられていました。そのまま放置してあったのを
なにかしらまとめたいと思いました。論考をまとめるような経験もなく、読み者で
特に発表の必要もなく、でもも う一歩踏み込んで考えたいと思っていました。
少し書いたものの、途方に暮れている旨、もようビーク月前に川村記念美術館への道中を
ご一緒した初対面のFさんに話したら、後日メールを下さって、途中の段階を開いて
ブランクーシの会のような対話の機会を持てたらいいですね、と助言をいただき、
本当にそうだな、きちんとした形で出すことを考えずに、求心的にすぐまとまれい
周辺に広がるような、途中を開いていけるような対話の機会が得られたらいいなと
夢想するようになりました。
ブランクーシに限定しなくていいのです。
その周辺で「見ること」や「在ること」「かたちつくること」を巡って。
これは、そのはじまりの声かけです。ぼちぼちはじめたいと思います。
ツッターとして、私の初期段階のtwitterでのつぶやきを時系列に並べあります。
興味をもってくださったら、軽い気持ちでゆるな風にでも応答してください。
メールはcoizumi@sf7.so-net.ne.jp
郵便の場合、私の住所をご存じない方は、楓画廊まで。
つけてまた印刷物をつくるか、文通するか、
少人数の茶話会のような機会でもつくれたらいいなと思っています。

vol.0

1

20130612　先日図書館で借りてきた『ブランクーシのフォトグラフ』。白黒写真だからってこと以上に、世界が脱色されてる感じ。眼差しから、色が抜き取られてる。物（物体）の在る姿、置いてある感じ、重さの感覚に奇妙な心地よさ。

20130619　私、はじめにブランクーシの作品を本か何かで知ったとき、何をどう勘違いしたのか、この人は盲目の彫刻家なのだと思い込んで、そうでないと知ってからも、ずっともう一つのストーリーとして、盲目のままのブランクーシが続いてしまっている。かたちは手で何度も触れられて、私のとは違う心の目が向けられているのだと思い込んでしまう。（それはある意味間違っていないだろうし、これは単なる勘違いのどうでもいい話でもあるのだけど）（個人的な思い入れ）

@fukudanaoyo「見えないものは何だったのか」に応えつづけて制作が続いているのですね。そういう行く道にたどり着いているのですね。さらに長い道に。凄い。

@fukudanaoyo 私はピアノの練習、楽譜とのやり取りの過程 *1 と重ねて、ちょっとドキドキしていました。でもまだ全然わからない。／手が止まったり、やり取りの過程であった豊かな空間が消滅したり、消えてしまって戻れないことや、楽譜に乗せられた言葉が何だったのか、応えられないままで。

@fukudanaoyo そうですね、彼をということではなくて彫刻がですね。ミニマルや抽象といわれることがあってもしっくりこないのは、視覚的でないから以上のものを感じてしまう。それでいて彼が自分で作品の写真を撮影することにこだわっていたという話を先日読んで、とても興味深かった。

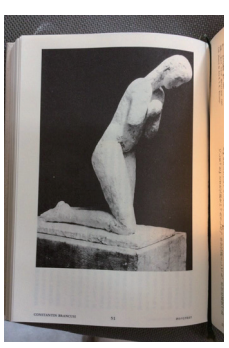
@fukudanaoyo「盲目の～」という悲劇の物語のようなニュアンスを打ち消しておっしゃったのかと勘違いして同意してました。

@fukudanaoyo 彼のつくる作品は見ていない、見えていないってことですね。その感覚、わかります。それも私の勘違いの物語を強力に裏付けてしまっています。卵のかたちもそうだけど、幼い私には、素直に目のない首像が強烈だったのかもしれない。

@fukudanaoyo 卵は完全なかたちとして（頑丈に）閉じていて、それでいて開かれるものとして全てに向けて（無防備に）開いているかもしれませんね。

20141027　写真を見ると、撮影者の視線がそこにあったり、それをセレクトした人の視線がそこにある。特別な価値として言っているのではなくて、意識の度合いに幅はあるけど、自然に人が見ていることが感じられる。ブランクーシーを目が見えない人と私が思い込んでしまう理由の一つは、彼の写真の「見ること」がちょっと普通と違う方法のように感じられるから。*2

20150201　『ブランクーシ』中原佑介著・美術出版社（右画像）

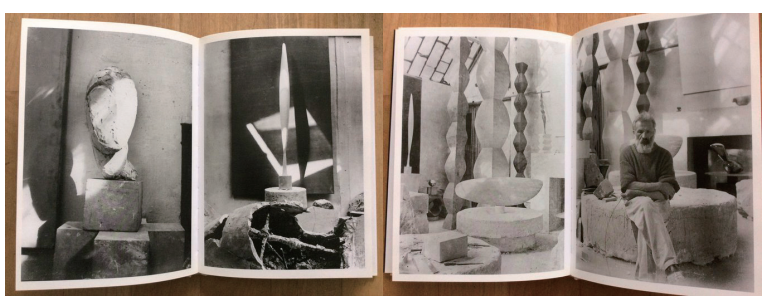


2

20150307　サティはブランクーシとも仲良しだったの知らなかった。

20160225　以前、ブランクーシが盲目だと思い込んでいて、そうでないとわかってからもその感覚が払拭できずにいると呟いた。かたちがつるっとしていて触ったら気持ちよさそうというようなことではなく、彼自身によるモノクロの作品やアトリエ写真を見ていると、かたちに光が当たる感じが、光を物体的に捉えている感じがして。例えば、弱視の人が光と影を頼りにどのように見ているのか想像でしかないけれど、その陰影を頼りに外界を物体として作り直していくような変換作業が起きているように感じられるってことかもと。*3 印象論でしかないけど。光もかたちも物体という意味で。光が手みたいにものに触れてる感じ。若林奮 *4 さんの作品はときどき、世界が全部水没してるように見えているのかしら?と感じることがある。長岡に越して、雪がたくさん降り続いていると、その水没感が私にも起きて来る。この冬と昨年の冬は、とにかく雪が少なくて、私はちょっと戸惑っている。

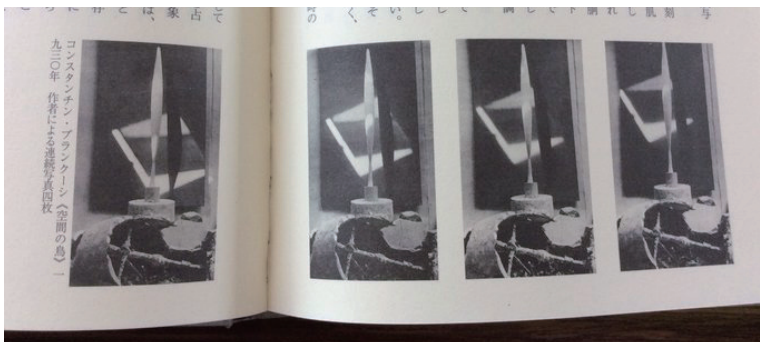
20160301　（雪が少ない、て呟くと降る気がする）昨晩車で出かけた時は、大きな雪片が空中を埋め尽くすのではというくらいに降っていた。夜中は風も。びゅー、ごー、高低入り混じった強い流れの音。今は細かい霰が風に流されて窓に叩きつけている。ブランクーシの写真、美しい。量の計れないようなものを敢えて計ってみるとする。一旦数値になるとして、数値になってわかりやすくなったようでいて、その数値の実際のところは、結局全然わかってない。*5



『BRANCUSI PHOTOGRAPHS』
Elizabeth A. Brown
ASSOULINE

20170308　今日は昨日より雪が多い。昨日の夜からまた急にブランクーシのことが気になってるのだけど、私には彼が盲目の彫刻家だという勘違いが残っていて、だけど、視覚に代わるものは触覚という表面的な質感ではなくて、塊に触れ続けている状態。この「現実の物質を消し去ってしまおうとした」（『第 6 巻　現代彫刻論–物質文明との対峙』中原佑介美術批評選集 BankART 出版　p.73）っていうのが凄く

しっくりくる。ブランクーシの自身による作品写真が本当に魅力的なのだけど、例えばこの連続写真からは、この『鳥』に当たっている光のところから、太陽にすーっと撫でられている熱を直に受けとれるところ。(『彫刻の呼び声』の図版から) 視覚的にでなくて、かたちを捉えているところを、視覚で見てるわけなのだけど、、、、



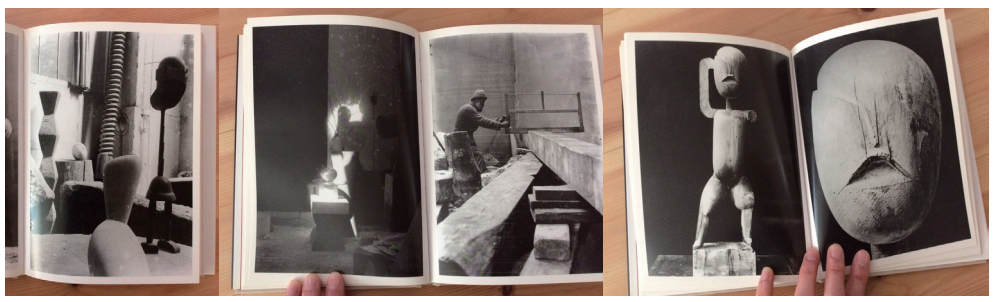
『彫刻の呼び声』
峯村敏明
水声社 2005

20170309　@yocoweis ブランクーシの写真集があって、洋書と和書で手に入るのですが、機会があったら、彼を盲目と思い込んでその写真集をご覧になって見てください。私には身近に盲目の友人がいるわけでもなく、そういうことのリアルについて言いたいわけではないのだけど。微妙な話ですみません。

@yocoweis 目をつぶって世界を見るとか、目をつぶってシャッターを押すと言ったほうがいいのかもしれないけれど、瞬間的なことではなくて、持続的なまなざしに感じます。

@yocoweis ポートレイトもですが、こういうアトリエの写真からもそう感じます。とても惹きつけられる写真ばかりです。彼の作る頭像(のようなもの)に、目がなかったり、目のようなものがあっても、見る機能を放棄しているように私は感じてしまいます。

『BRANCUSI PHOTOGRAPHS』
Elizabeth A. Brown
ASSOULINE



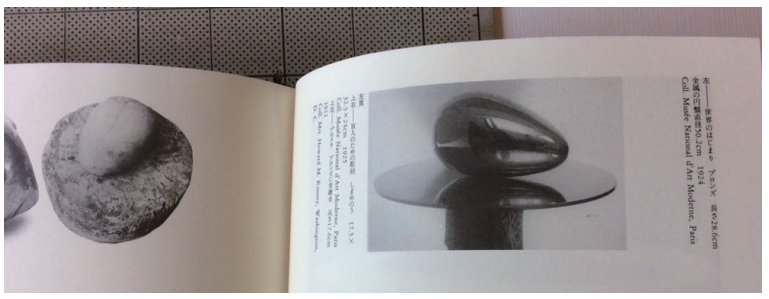
@yocoweis 私も彼について書かれたものはあまり読んだことがなかったので、家にある彫刻関連の本から、記述箇所を探して読んでみました。今度図書館でも探して読んでみたいです。

20170408　ブランクーシについての本を読んでいるのだけど、私はブランクーシのようには考えられない（考えが違う）けれど、ブランクーシが自作を見ていたように、見ることができるかもしれないという微かな希望を保ちながら読み進めている、今のところ。入って行き方にシンパシーなのかな？勿論、違ってていい。

20170414　『コンスタンチン・ブランクーシ』美術出版社、モダン・マスターズ・シリーズ日本語版より　2 枚目下の「世界のはじまり」と 4 枚目のアトリエの写真はブランクーシ自身による撮影。　エリック・ジェインズ著　著述内容はイデア（プラトニズム）や還元主義的な意味内容に関する記述が多めで、そればかりではちょっと残念だった。ゆえに、ブランクーシの作品は作品自体が本当に魅力的なんだなとも。還元して行ってこのカタチなんだもの！というか、ブランクーシの自身による写真が、やっぱり凄くいいなぁ。

20170426　できた作品について、図面見ても、スケッチ見ても、言葉で説明しようとしても構造を説明しずらくて、写真を沢山撮ってしまいました。ブランクーシの写真が好きなのもあるけど、作品を被写体して写真にすることがここ暫く気になっています。

20170512　いまさらですが　私が盲目の彫刻家と思い込んでいたブランクーシ。彼の作品に「盲人のための彫刻」という（「世界のはじまり」のうちのあるものにつけた）タイトルがあったと。(『ブランクーシ』中原佑介著・美術出版社)



20171109　とらえどころがないものだったり、どこを見るのかよくわからないということを含んでいると、どこか不安な感じになる。心許なさも不安に似ていて、それを心地よくも感じられることがある。不安を孤独と言い換えてくれた人もいたな。不安の得体の知れない内容について、個人的な心理とは無関係に考える。これ、私が今不安になっていて、個人的な気持ちを押しのけようとしているとかそういうことではないです。かたちを見たり、見ている人を見ての、感じたり、考える手がかりです。私、ブランクーシのこと思うと元気になるんだよな。彼がひとりでアトリエで自分の作品の写真を撮っている時のことを想像して、何か濃密なものを貰う感じがするの。

@tkh4daisuk そうですね、対象を持たないものですね。宙に投げ出されて、スケール感も方向感覚も失ってなお、受け取ることができるものがあるよなと。

20171115　「振動尺」と「雰囲気」の若林奮と、アトリエの中で自作を撮影するブランクーシと、洞窟の暗闇の中で長い杖を身体化して空間を把握しようとする人間の能力について、繋げて興味がある。それは平たい土地に降り続く雪の中で過ごした日々がきっかけで、空間を量的に感じるようになったから。

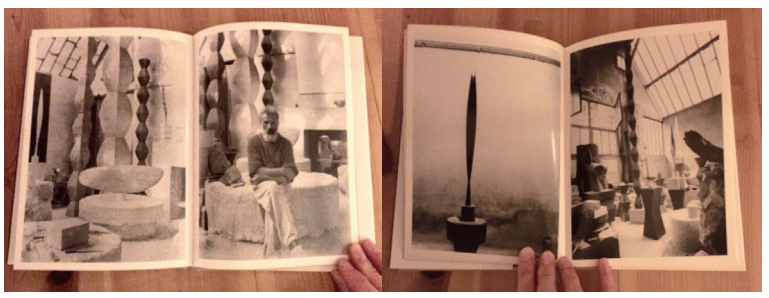
20171118　気になってきたのがここ数年で、そこに行ったことないどころか、ブランクーシの作品を見たこともほんの数回だけです。でも、特に興味のあるのは彼の写真なので、この頃はいつも鞄にブランクーシです。

20190704　『ブランクーシのフォトグラフ』(日本語版 1997 ／解説：エリザベス・A・ブラウン／監修：嘉門安雄／求龍堂) を見てる。先日行った川村記念美術館の常設会場にブランクーシの作品が展示されていたのを見た。私にとっては実物の方が参照資料で、写真の方がより多くを含んだ作品に感じられる。そういえば、一月以上前に行った、小島敏男さんの個展「彫刻 素描 写真」(ギャラリーカメリア GalleryNayuta) がとても印象的だった。小島さんにもお会いできて、私も作品の写真を撮ったりするのです、ブランクーシの写真がとても気になっているとお伝えしたら、ロッソ *6 のことを教えてくださった。印象は、ただ一つの印象のままでは留まらない。

20190705　ブランクーシもロッソの作品に強い興味を示していたのですね。

20200521　ブランクーシの没後、自作の写真を含めて千枚以上の写真がアトリエに残ってたって中原佑介さんの本に書いてあって、自作以外の写真も凄く見てみたい。

『BRANCUSI PHOTOGRAPHS』
Elizabeth A. Brown
ASSOULINE



補足 点

*1 当時、高橋悠治さんの CD からサティに興味を持って、楽譜もろくに読めないのに独学でピアノの練習をした。サティの楽譜には、奇妙な言葉が添えられていて、それが練習の場面でイメージを伴う不思議な作用を及ぼすことについて考えていた。

*2 「見ること」がちょっと普通と違う方法に感じられることについて、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』伊藤亜紗著（光文社新書）を読んでいます。また、写真というメディアや機構などについても知りたい、考えたい。

*3 「変換作業」についても別の機会に。

*4 若林奮さんの制作や作品についてはとても興味を持っていて、彼の「見ること」は雪の多い長岡の風景による私の変容とも関わりがあるように思っている。ブランクーシの「見ること」との差異を相対的に考えてみたい。特に、2003 年の川村記念美術館での企画展示「若林奮　振動尺をめぐって」の図録に掲載の沼辺信一さんの「空間を測ることは可能なのか」に私はとても触発されている。空間を伴って見ること、考えること。

*5 のちに、箱の板の体積を算出して加算し、塊を数値化してみたり、同じ板の体積のシンプルな 1 つの箱の大きさを算出した数値を記録するスケッチを制作した。
右：コイズミアヤ（「重なる箱 _3」をめぐる計測とうつしかえ）2014-2019

*6 MEDARDO ROSSO については、以下のサイト記事が面白かった。
「空間においては、いかなるものも物質的ではありえない」— 池野絢子
https://magazine.air-u.kyoto-art.ac.jp/essay/843/